

J.S.ミルにおける快樂の判定

林和雄（京都大学）

『功利主義論』においてジョン・スチュアート・ミルが、快樂の質的差異に言及することによって、快樂主義を「豚にのみふさわしい学説」とする批判への応答を試みたことは広く知られている。彼によれば、「ある種類の快樂は他の種類の快樂に比べ、いっそう望ましくて価値がある」。そのような快樂の質的判定基準は、両方を経験した人の選好である。こうした人々を、ミルは「資格ある判定者 (competent judges)」と呼ぶ。ところで、知性・感情や想像力・道徳感情の快樂といった人間に特有の精神的快樂と、感覚による動物的、肉体的快樂との両方を等しく楽しむことのできる人が、「自分の持つ高次な能力を使用するような生き方をはっきりと選好することは疑問の余地がない事実である」。したがってミルの快樂主義は、動物的な快樂よりも、高次な能力に由来する快樂を高く評価することができるため、それを「豚にのみふさわしい学説」とする批判を免れることになる (*Collected Works of John Stuart Mill, X, pp.210-4*)。

以上のように、ミルが快樂の質を判定するために経験者の選好を用いようとした点には、彼の思想と、それに先立つジェレミー・ベンタムの思想との間にある大きな相違が現れていると言えるだろう。「ベンタム」をはじめとする様々なテキストにおいて、ミルはベンタムが諸個人の性格の可変性に十分な注意を払ってこなかった点を繰り返し批判している。快樂の判定をめぐる諸個人の感受性を所与のものとして固定的に捉え、快樂は各人の主観によってしか評価できないと考えるベンタムに対して、ミルは諸個人がより質的に優れた快樂を感じられるようになっていくという性格形成のプロセスを念頭に置いていたからこそ、様々な種類の快樂を感じることでできる人々の選好を重視し、いかなる活動に由来する快樂が望ましいのかという問題に対する間主観的な知識を得るための手がかりと見なしたのだと考えられよう。

そのような、諸個人の性格形成のプロセスに注目するミルの思想の特色と、快樂の判定の議論とのつながりを踏まえ、ウェンディ・ドナーのような論者は、快樂の「資格ある判定者」を、知的・情緒的・道徳的な発展を遂げた人々と同一視する。しかし、この解釈は次のような問題を抱えているように思われる。仮にドナーの主張するように、ある仕方での発展を遂げていることが、快樂を判定するための条件であるとするならば、快樂の評価に先立ってそのような発展自体が評価されているということになり、そこではもはや、快樂主義ではない立場からの価値判断が行われているのではないだろうか。快樂主義の立場に基づくならば、知的・情緒的・道徳的な発展を望ましいとする判断は、あくまで快樂の判定の結果から導き出されるものなのであって、それに先立って行われてはならないはずである。このような問題を克服すべく、本発表では、ドナーの解釈を批判的に検討しながら、快樂の判定は特定の仕方での発展への評価を前提するものではなく、ミルの経験主義的な方法論に基づく手続きであるということを示したい。取り組まれる問いは、「資格ある判定者」とは誰か、快樂の判定はいかなる仕方、様々な快樂やそれを感じることでできる性格の優劣を明らかにしようとするものであるのか、というものである。